

さいたま
見沼

よみさんぽ

2020

Vol. 34

まち歩き 2

先達の遺してくれた見沼を学ぶ

記録写真家 柿内未央

先達の遺してくれた見沼を学ぶ

3月に開いた本紙の編集委員会では、地名に着目し、分担して取材することになっていました。ところが、COVID-19の感染拡大により、非常事態宣言が出され、取材がままならなくなったのです。

今号では、この地への深い愛着が伝わってきた片柳図書館で出会った3冊の本（写真）をガイドに身近な見沼を探索しました。



文献（左から）

若山法一：片柳のむかしを探る；私家版、1978年9月

大宮市教育委員会社会教育課：片柳のむかし、1985年12月

大宮市片柳公民館：片柳のむかし、1988年3月

目に飛び込んでくる加田屋新田の緑

日光御成街道を北上し、「らんや（黒白洋らん園）」の大きな看板を目印に左折すると加田屋橋を中心に景色が開けていきます。春は桜と鮮やかな菜の花のコントラスト、しばらくすると田に水が引かれ、田植えが終わると日に日に緑が濃くなり、緑の絨毯がやさしく迎えてくれます。今は少なくなってしまった貴重な田んぼが広がっているのです。



見沼野の水輝ける初燕

また次の白雲過ぎる青田かな

吉井まさ江

先に紹介した「片柳のむかしを探る」によると、1727（享保12）年に井沢

弥惣兵衛為永によって干拓されるまでの見沼は関東第一の湖沼でした。当時は三沼、美野波、箕沼などの呼称があったそうで、この周辺にはいくつもの沼が散在し、水産物で生計を立てる漁師もあり、水は周辺の重要な灌漑用水でした。しかし、常に水害の被害をこうむる地域でもあったのです。

実際には、井沢弥惣兵衛の干拓より 100 年前にこの地の郡代だった伊奈忠治が見沼溜井をつくりました。それによって下流域の農村が恩恵を受ける一方、見沼周辺の村々は水害で悩まされていたのです。その見沼溜井から 46 年後、江戸の商人だった坂東助右衛門が見沼の一角を開拓し、それが加田屋新田でした。しかし、水をめぐる村々の諍いもあり、40 年後には元の沼に戻ってしまいました。そうした歴史から、水害・干ばつに悩まされながらも、この地で生きてきた人々の姿を思い浮かべることができます。（見沼代用水の完成後坂東家は加田屋新田を再開発します）

土木技術の天才 井沢弥惣兵衛

江戸幕府の財政を立て直した享保の改革を行った徳川吉宗（米將軍とも呼ばれた）が、見沼田んぼの開拓のために故郷の紀州より呼んだのが井沢弥惣兵衛為永でした。その時井沢はすでに 60 歳を超えていました。

井沢は、今もみぬま自然公園で見沼野を見守っています。自然公園の駐車場を抜けると芝生が広がり、その一角に井沢の銅像があります。井沢は土木技術の天才と呼ばれ、その部下たちと技術者集団を組織し、農民たちの話をよく聞



梅雨明けや大きな音に鯉跳ねる
葭切のなきどよもせる水の照り

吉井まさ江

き、親しまれていたそうです。封建時代にあっても身分の上下に関わりなく、人々を大切にすると伝えられています。

井沢らは、見沼の周りを徹底的に調べ、その結果遠く利根川を水源とすることとし、利根川中流（現在の行田市）から 60 キロにわたる水路開削工事に着手し、わずか半年で従来の溜井に代わる見沼代用水を完成させたのです。工事には周辺の農民延べ 90 万人が動員され、幕府は 2 万両を投じ、1,200 ヘクタールの新田が開発され、灌漑面積は 12,600 ヘクタールにも及んでいました。

見沼代用水について調べていくと、龍神伝説が大きな影響を及ぼしていたことがわかります。龍神の住处だった見沼を埋め立てて田んぼにするわけですから、龍神は居場所を失うわけです。井沢は住处を失った龍神にも心を砕き、井沢が一時的な住まいにしていた万年寺に龍神灯を祀って龍神の霊を慰めました。龍神は見沼田んぼと引き換えに棲む場所を失った動植物を象徴しているようにも思えます。人が生きるための開拓が自然を犠牲にする、……龍神はそのことを忘れてはいけなと伝えてくれているようにも思えるのです。

自然と人間が作り上げてきた見沼

私は今当たり前のように染谷にある事業所、やどかり情報館で働き、ふと窓の外に目をやると飛び込んでくる豊かな緑、日々見沼野の自然に囲まれ過ごしています。しかし、この地域が今あるのは営々とこの地で農業に励み、自然を守ってきた先達たちの力によるものなのだと改めて感じました。この地は、自然と人が創り合う地域なのです。自然があるからこそ、私たちの暮らしがあるのです。だからこそ、人の手が関わった自然を人は守っていかなくてはならないのです。そして、この地を 50 年後、100 年後どんな地域として、次の世代に引き継いでいくのか、今を生きる私たちに託されているのです。

（記 増田 一世）

文献 市川正三（画文）：井沢弥惣兵衛；見沼代用水土地改良区、2005

謎に迫る楽しさ

並木せつ子



今回は『地名でたどる埼玉県謎解き散歩』（宮内正勝他編著、KADOKAWA、2014年）と『さいたま市地名の由来』（青木義脩著、幹書房、2013年）という2冊の本の中から、さいたま市の地名にまつわる話をご紹介します。

見沼区の加田屋新田は、江戸時代、日本橋で加田屋という商家を営んでいた坂東家が開発した新田に由来する地名です。この屋号は坂東家のふるさと和歌山県の加太（現和歌山市）からつけられたとか、意外な所にルーツがあるものです。

昭和初期の浦和では一時期、若松町、弥生町、初音町など東京にある町の名がつけられたことがありました。しかし公簿に載ることもなく短期に終わったようです。これら幻の町名は今も電柱の管理プレートなどに残されています。

西区の西遊馬^{にしあすま}、見沼区の東門前のように、東西の片方しかない地名があります。江戸時代、西遊馬は「足立郡の植田谷領の遊馬村」でしたが、明治になって領を廃したところ「足立郡の遊馬村」が二つになってしまいました。そこで西と東をつけて、どちらの遊馬村かわかるようにしたのです。その後、町村合併や市制施行などによって、東遊馬村は現在の草加市遊馬町になり、西遊馬だけさいたま市内に残ったというわけです。東門前に対する西門前は上尾市西門前です。

2冊の本に載っている言葉「土地に刻まれた人々の足跡」「地名から歴史がわかる」が示すように、地名は土地の歴史・地理・風習そのものと言っても過言ではないと思います。既に全国各地で多くの歴史ある地名が失われていますが、さいたま市でも中世から続いた与野の地名があえなく消えてしまったのは残念です。このことを惜しむ気持ちが、2冊の本から共通の思いとして伝わってきます。

地名の由来はミステリのように必ず謎が解けるものではありません。それでも謎に迫ってゆく楽しさを存分に味わえるのが地名の本です。

胡蝶蘭が運ぶ幸せ

新型コロナウイルス感染症が流行し、外出する機会も減ってしまいました。ここ、やどかり情報館（さいたま市見沼区染谷）もどこか暗い雰囲気漂う中、程近くにある黑白洋蘭園の方たちが、「幸せを届けようプロジェクト」として、美しい胡蝶蘭を届けてくださいました。

このプロジェクトは、洋蘭園のインターネットショップで贈答商品を購入した方に、商品と同じものをお届けする、というもの。また、市内の小・中学校や近隣の幼稚園、郵便局や銀行、コンビニエンスストア、福祉事業所……人が集まるところにも胡蝶蘭が届けられました。4月から5月末にかけて行われたこのプロジェクトで、2,000 件に胡蝶蘭が配られたそうです。

「胡蝶蘭の花言葉は『幸せが舞い降りる』。一鉢でも多くの胡蝶蘭を届けることで、少しでも心が和み、癒しになれば……そんな思いでプロジェクトを始めました」と話すのは、洋蘭園代表の黒白秀之さんです。

「私たちははもとと、世の中に胡蝶蘭を届けて、癒されたり、明るくなったり、喜んでもらったり……その姿をイメージしながら花を作っています。蘭を届けることで、『自粛疲れで萎える気持ちが明るくなった』『癒された』という声をたくさんもらい、とてもありがたかったです」

「企業もダメージを受け、余裕がなければ花を飾ることも控えられてしまいます。兼ねてから日本はヨーロッパと違い、生活の中に花を飾る習慣がなく、花の需要が少ない。若い人にも花の価値を伝えていきたいと、花育にも力を注いでいます。花のもっている力、その価値を伝えていきたいと思っています」

やどかり情報館の玄関で出迎えてくれる胡蝶蘭。来館者を明るく、元気な気持ちにさせてくれます。改めて花のもつ力に気づかされつつ、その一鉢からは、丹精込めて花を作る人たちの姿と、笑顔届けたいという作り手の思いが伝わってくるようでした。

（記 萩崎 千鶴）

有限会社黑白洋蘭園

〒337-0026

埼玉県さいたま市見沼区染谷 1-188

ホームページ <https://kotyou.net/>





よみさんぽ編集委員のつばやき

猫の名前

並木せつ子

 吾輩は猫である。名前はとらみ。キジトラ模様の女の子である。どこで生まれたかとうと見当がつかぬ。世間では保護猫というらしいが吾輩の預かり知らぬことである。

 家の猫が小説を書いたら、こんな出だしになるだろう。子猫のとき保護されたのに、警戒心が強すぎてなかなか里親が決まらず、私のもとに来たときには既に2歳だった。私のほうも里親になれる制限年齢の60歳だったから、お互いぎりぎりセーフ。出会えたのはご縁と言うしかない。好きな名前に変えてかまわないと言われたが、2年間もとらみと呼ばれてきたのだからそのままにした。

 吾輩も変な名前だと思ったのだが、ボランティアさんの家は猫の出入りが頻繁で常時5～6匹いる。色や柄にちなんだ手軽な名前でも仕方ないと思っていたのだ。ふと気が付いて見ると吾輩と一緒に保護された姉妹たちは紫苑やら珈々垂やらハイカラな名前ではないか。断じてチャ太郎とかブチ子ではないのである。しかし明治時代の文豪に飼われた猫など名前も付けてもらえなかったと聞いておるので致し方がない。

 本当はペットの名前にこだわりたい気持ちはあったのだ。家で最初に飼った犬はチロ、2代目はコロ、3代目はジロで、その後に飼った猫はシロと、代々安易な名前だった。子どもの頃、『シートン動物記』の「裏町のすてねこ」に出てくるロイヤルアナロスタンのようなカッコいい名前がいい。次に飼う動物には絶対カッコいい名前を付けるぞと決意していたのである。

 かくして吾輩はついにこの家を自分の住家と極めることにしたのである。炬燵の中が一番好きだがこの家の主人はけちなので寝る時に炬燵を消してしまう。そこで吾輩は主人の布団の中に入る。これはあながち主人が好きという訳ではないが寒いのでやむを得んのである。

 あれから10年、とらみは「とらみ」のままで悠々と淡々と過ごしている。人間も猫のおかげで幸せだ。それにしてもドラミと間違える友人が多いのは困ったことである。

あの街 この街 俊一郎が行く・28

自粛とカレー

引きこもり気質

こんにちは！ コロナウイルスの流行で、想像もしていなかった世の中になってしまいました。きっと不穏な気持ちで過ごされていた人も多かったはず。私はもともと引きこもって何かをするほうが向いている性格だからか、日頃から人と会うことが少なく、そこまで困ることはありませんでした。ただ、旅をする環境としては半年で大きく変わってしまった世界の様子に驚いています。

下町の日常

朝、犬たちと出勤し、仕事をし、夕方になったら犬と帰る。仕事も生活も下町にまともまっているので、普段と変わらない生活を送ることができました。仕事中、犬たちは足元でひたすらと眠り続け、夕飯時になるとソワソワし出して、いろいろな悪さを始めますが、そんなことにも対応できるので穏やかな日々が過ぎていました。幸いなことに、社内の人たちもほとんどが自転車で通える範囲に住んでいるため、心配事も少なかったです。唯一、電車通勤になるスタッフも時差通勤などで折り合いをつけていました。



街から灯りが消えた日

ただ、最初は悠長に構えていたこの騒ぎも、街から灯りがなくなり、人々が消え出したあたりから、深刻なものに感じ始めました。普段は夜の7時くらいに帰宅し、犬たちに餌を与えてから食事をしますが、外食の場合、その時間ではお店が開いていないという日々が続きました。普段通りに食事の段取りができなくなってしまったのです。普段から自炊をしていたのでなんとかりましたが、独身のスタッ

とまつりしゅんいちろう
都祭俊一郎

1975 年生まれ。生まれも育ちも、東京の下町。
エンジュの新築の他、保育園や幼稚園の設計（新築及び改修）
を複数行う。（写真 新 良太）



フたちの夕食事情を聞くと、面倒くさいから缶チューハイとポテトチップスを
食べて寝ましたと、しれっと答える始末。自分の独身時代を思い出すと人のこ
とは言えませんが、オイオイと言いたくなる状況でした（私の場合はコーラに
ポテトチップスだった……）。

ボスカレー

だから、気分が乗った時に作っていたカレーを作る機会が増えました。もと
もとはジャガイモを大量にいただいた時に始めた習慣、幸いなことに皆からも
好評で、月に数回はカレーを作って事務所に持ち寄るようになりました。

自分を含め、メタボな人が多い職場なので、作る時のこだわりは市販のルー
を使わないこと。味付けは素材から出る出汁と塩がメインです。味付けがもの
足りなければケチャップなどで補えますが、いつも困るのはご飯に絡むための
トロミづけでした。小麦粉を使わないようにするために試行錯誤し、時にはす
りおろしたレンコンを入れたり、ジャガイモをあえて溶かすように使ったり
……ですが、なかなか安定しないので困っています。

カレーは薬膳

そうして作るカレーですが、一番の楽しみはスパイ
スを混ぜ込む時。ベースにはミックスしてあるスパイ
スを使うけれど、その日の気分で、いくつかのスパイ
スを加えて香りを変えてみます。そうして作ったカ
レーは、喉を通る時に、胸にじわーっと広がる香草を
食べた時のような清涼感が感じられ、病みつきになリ
ます。まるでスパイスの薬効を得るための薬膳をいた
だいているみたい。そんなカレー作りが先の見えない
この時期の小さな楽しみであり、実験でした。





未来を拓く

つなぐ・つくるプロジェクト・2



やどかりの里では、「未来を拓く つなぐ・つくるプロジェクト」として、この見沼の地の宝物を探し、その宝を生かしつつみんながつながれる場づくりを考え始めました。プロジェクトでは、高齢者の分野で活動されているお2人のお話から、みんながつながれる場について考えてみることにしました。

認知症になっても安心して暮らせる社会

今回ご紹介するのは、認知症になっても安心して暮らせる社会を目指して活動している「認知症の人と家族の会」副代表の花俣ふみ代さんと、埼玉県若年性認知症支援コーディネーターの佐藤史子さん。お2人とも熱い思いを抱きながら、精力的にさまざまな活動に取り組んでいます。

同じ経験を共有できる仲間の存在

「認知症の人と家族の会」は、1980年に京都で結成された全国組織です。花俣さんは国の社会保障審議会介護保険部会の委員も務め、家族の立場から必要な施策を提言されています。会には支部があり、埼玉県支部は1981年に結成、会員数は約430人。総会員数は10,839人です。つどい、電話相談、会報の発行を活動の3本柱に、施策の充実や調査・研究、講演会など認知症の理解を深める活動も進めています。

会の活動には同じ経験のある家族だからこそその励まし合い、助け合いがあると花俣さんは言います。中でも、つどいの活動はまさに顔の見える仲間づくりで、初めて参加する人はみな、せきをきったように涙を流しながらご自身の経験話をされるそうです。「介護を担う家族は評価も成果も見えない中、落ち込み、負の循環にはまっています。つどいは、外では言えないことを言える場です。同じ立場の人同士が安心して話ができる、“そういうこと、私もあったわ……”とさざっと共感し、受け止めてもらえるんです」

若年性認知症の人を取り巻く状況

一方、佐藤さんは若年性認知症の支援に携わり、普及活動などにも取り組んでいます。若年性認知症は65歳未満で発症する認知症で、男性に多く、初発時はうつ病や更年期障害と間違われることもあり、診断が難しいと言われています。利用できる制度が少なく、例えば一家の大黒柱だった30代、40代の男性が発症することで雇用問題や経済的問題、子どもの教育や就労など直面する課題も多岐にわたり、主たる介護が配偶者に集中しやすいことも多いと言います。

佐藤さんは、「職場の配置転換などの工夫で働き続けることができる場合がありますが、職種によっては困難なこともあり、働く場が失われることが多くあります。しかし、病が進行するからと言って何もできなくなるわけではありません。繰り返し経験したり助けがあることで、できることが増えていくんです」と訴えます。環境を整えることで、障壁だったものが障壁でなくなることも多いのではないのでしょうか。

居場所づくりは“生きる場”“生き場”づくり

今般のコロナ禍においては、外出自粛の影響で孤立感が増し、ADL（食事や入浴などの日常生活動作）や認知機能が低下する人もいて、花俣さんは弱者にしわ寄せがくる社会と言います。孤立した生き方はつらさを増すばかりで、「助けて!」と声を上げる勇気と相手の気持ちを思いやる心のゆとりが大切と話します。そして、居場所づくりと社会参加が可能な資源が必要と考えています。

「居場所の理想は、1人でいても緩やかにつながれて心が落ち着く空間です。落ち着くものは人それぞれですが、光、風、におい……五感が満たされ、ストレスにならない環境です」と佐藤さん。「居場所と言っても居るだけではなく、生きる力になったり、活かせることがあったり、行く場所になったり……。そんな“生きる場所”、“生き場所”になったらいいと思っています」と花俣さん。

心穏やかに過ごせる場は、疾患や障害のある人に必要な特別なものでなく、私たち1人1人にとって必要な空間です。緩やかに人とつながり、生きる力を取り戻していける、そんな穏やかな空間をプロジェクトを通して創っていければと思います。

（記 三石麻友美）

認知症のひと家族の会（埼玉県支部）(http://www.alzheimer.or.jp/?page_id=371)

電話相談（月～金、10時～15時）048-814-1210

若年専用・電話相談（月～金、9時～16時）048-814-1212

芝川ヤギ部ヤギ日誌

ヤギがつなぐ和・輪・環 ①



芝川小学校（さいたま市大宮区）の飼育小屋には、2匹のヤギが暮らしています。石川顕一前校長と前PTA会長の岡野友敬さんは、以前から学校と地域をつなぐ1つのきっかけとして、生き物の存在に着目していました。今ではヤギに魅せられた人たちが集まって「芝川ヤギ部」が誕生し、大人も子どももその存在の虜になっています。

今回は、定例となっている「ヤギ散歩」に同行しつつ、ヤギ部の中心的役割を担う岡野さんにお話を伺ってきました。

広がるヤギ部の夢

東関東子育てサポートセンター（茨城県五霞町）から2匹のヤギ、「楓」と「桜」が芝川小学校にやってきたのは、2019年2月のことでした。そこから岡野さんをはじめ、芝川小学校のおやじの会やPTAのメンバーを中心に、毎日の餌やりや散歩が行われるようになりました。子どもたちも学校が終わると手にゴミ袋を携えて、ヤギたちがごみを食べてしまわないように、散歩しながらゴミ拾い。



芝川ヤギ部では「～しなければならない」ではなく「～したい」「自分のできることをやる」「こういうことならできる」を大切にしています。ヤギを想う気持ちは共通ですが、参加の仕方は人それぞれ。ヤギのお世話をするだけではない参加のス

タイルもあります。画家の岡野さんはヤギ部のロゴをデザインし、そのグッズを販売しています(14 ページインフォメーションコーナー参照)。その収益を、ヤギを育てる費用に充てられたらと考えています。「グッズを買うことでヤギを支えてくれる人もヤギ部の一員」とにこやかに語ってくれました。

ヤギの散歩道に「ヤギカフェ」があれば、地域の人が集える場所になるのではないか、そのカフェでヤギのミルクを使った商品を販売したら面白い……などなど、ヤギ部の広がる夢にワクワクさせられます。

ヤギを通じて広がる輪

「ヤギ」の存在に可能性を感じていると岡野さんは語ります。さいたま市には見沼たんぼがあり、豊かな自然があります。大宮駅まで歩いていける芝川周辺にも、ヤギが散歩しながら、安心して草葉を食べられる環境が残っています。散歩するヤギを通して、その環境の豊かさに目を向ける人が増えれば、それを守るために人と地域がつながることができます。

たとえば、耕作放棄地にヤギを連れて行って草を食べさせれば、草刈りの負担を減らすことができ、ヤギ部としては餌の確保ができる。「お互い様」の関係ができ、耕作放棄地が見直されていくかもしれません。そんな環境や関係性の広がりや、近年よく言われているサステナブル(持続可能)な社会の創造の一翼を担う可能性を秘めていると感じているそうです。

今回約1時間のヤギ散歩に同行する中で、何人もの人に「ヤギ? 飼ってるの?」「昔はヤギを飼っていた人がいたけど今じゃ珍しいね」「かわいい」と声をかけられている姿を目の当たりにしました。ヤギを連れていなければ、知り合いでない人に声をかけられることも少ないでしょう。「ヤギ」という存在がつながりを生むことを感じさせられる時間でした。(記 宗野 文)

今後も「ヤギ日誌
ヤギがつなぐ和・輪・
環」としてご紹介していきます。



ヤギ部ロゴデザイン/
岡野 友敬

インフォメーション

あなたらしい毎日を。

さいたま市内を中心にビルやマンションを管理する会社です。
ご自身のライフスタイルにあった時間でのお仕事があります。

清掃スタッフ募集中！
ご応募はこちら

今日も 明日も そっと。
毎日興業株式会社

〒330-0842 埼玉県さいたま市大宮区浅間町2-244-1
TEL 0120-156365 (フリーダイヤル)

芝川ヤギ部の応援グッズ

芝川ヤギ部は、ヤギをお世話することを通して、人と人とが笑顔で交流をし、地域や社会がより良いものとなることを目的として発足しました。グッズの売上の一部と応援チケットの諸経費を抜いた収益は、ヤギさんのお薬や小屋の手入れなどに使わせていただきます。地域に癒やしを与えてくれるヤギ活動をぜひ応援ください！

芝川ヤギ部応援グッズ好評発売中！！

こちらから！⇒

こころの悩み、ちょっと話してみませんか？

お住いの区の障害者生活支援センターまでご連絡下さい。

見沼区障害者生活支援センターやどかり 電話 048-682-1101
大宮区障害者生活支援センターやどかり 電話 048-795-4720
浦和区障害者生活支援センターやどかり 電話 048-793-6373

***精神障害のある方、そのご家族の地域の相談機関です。**

季刊誌 **響き合う街で** 93号

全面特集 **やどかりの里の50年**

2020年5月発行 1,200円＋税

*地域の皆さんの応援のもと、やどかりの里は活動50周年を迎えました。

やどかり出版 さいたま市見沼区染谷 1177-4
TEL 048-680-1891 FAX 048-680-1894

93 2020年5月
響き合う街で
やどかり出版

全面特集
やどかりの里の50年

1食からお届けします！（月～金）

「もったいない」をつなぐ&「モノづくり」でつながる

おかゆや 刻み食対応
ご希望の 曜日にお届け

管理栄養士が献立をたて、栄養バランスのとれた食事
昼食 550円/1食

受付 月～金（祝日のぞく）8:30～18:00 エンジュ
電話 048-686-7875 見沼区南中野 286-1

Recycle&Handmade
Stairs

公益社団法人やどかりの里 **すてあーず**
〒337-0042 さいたま市見沼区南中野 844-22 TEL：048-688-8223

すべての人々が人間らしく豊かに育ちあえる地域づくりをすすめるために
こうぬまふくしかい

社会福祉法人 鴻沼福祉会

こころを込めた手づくりの品をぜひ一度お試しください



い ち ず
とうふ屋 一豆

TEL 048-854-8000

FAX 048-854-3538

さいたま市中央区上峰2-10-20

つばさ共同作業所とそめや共同作業所が手がける、国産・手づくりこだわった本格とうふ。
宮城県産高級大豆「ミヤギシロメ」を100%使用し、オリジナル惣菜も人気です。
大豆本来の濃厚な甘さとコクを味わえる「小さなぜいたく」を食卓にお届けします。

きりしきのパン

TEL 048-854-6910

FAX 048-854-6942

さいたま市中央区円阿弥1-3-15 鴻沼福祉会館内

きりしき共同作業所のパンは食の安全・安心にこだわり、原材料に国産小麦粉を使用しています。(一部商品を除く)

この道30年の職人とともに手がけるパンは、少し懐かしい味と香りがします。



弁当屋 いちず

TEL・FAX 048-684-1257

さいたま市見沼区染谷2-145

そめや共同作業所のお弁当は旬を感じる手づくり弁当です。

野菜をたくさん取り入れ、手が込んでいると女性に大人気です。

鴻沼福祉会から読者の皆様へ

○鴻沼福祉会では、袋詰め・部品組み立て作業や清掃作業、資源回収など、地域の企業様のニーズに応えるべく様々な仕事を受注しています。働くことをとおして障害のある人がさらに輝けるチャンスを求めて新しい仕事にもチャレンジしつづけています。

○障害のある人たちの就労支援、生活支援、相談支援のスタッフを募集しています！ 問い合わせ先：048-854-6890 (担当オガワ)

鴻沼福祉会事業所一覧

●本部・事務局 埼玉県さいたま市中央区円阿弥1-3-15 鴻沼福祉会館内 TEL：048-854-6890 FAX：048-856-0313

《はたらく》●つばさ共同作業所(中央区) ●あざみ共同作業所(見沼区) ●そめや共同作業所(見沼区) ●きりしき共同作業所(中央区)
●さいたま障害者労働センター(橘川市)

《くらす》●第1たかさご荘 ●第2たかさご荘 ●第3たかさご荘 ●かえでホーム ●かりんホーム ●よつばハイツ

●なつめホーム(以上、中央区) ●のぞみホーム(見沼区) ●ひかりホーム(西区)

《ささえあう》●中央区障害者生活支援センター来夢 ●地域活動支援センター来夢(以上、中央区)

●見沼区障害者生活支援センター来人(見沼区)

さいたま見沼よみさんぽ

作者紹介

記録写真家 柿内未央さん(表紙写真)

“人としていかに生きるか”について考えるなかで、平和の基盤は自然との共生にあると痛感し、埼玉県の名石農園にて自然栽培を学ぶ。

生かされていること、全ての本質が等しくつながり合っていることを感受してから世界が変わり、その一部として生きたいと思うように。

自然とヒト・人と人をむすぶお手伝いがしたく、“自然とヒト”…いのちの記録をメインに活動している。

ホームページ <http://tomomusubi.com/>

9/1～9/6 柿内未央写真展
「めぐるいのち」開催

Nine Gallery

〒107-0061 東京都港区北青山 2-10-22
谷・荒井ビル 1F

表紙写真によせて

今号のよみさんぽの特集記事を拝見し、田んぼの写真を選ばせていただきました。

埼玉県にある自然栽培でお米を育てている田んぼです。

去年の台風が来たときは、周りの田んぼの稲は倒れてしまっていたけれど、ここの田んぼの稲は倒れずしなやかにそよいでいるのを見て改めて、自然に寄り添いながらもともと持っているチカラを引き出してあげることの大切さを感じました。

それは人にも当てはまるんだろうなと最近しみじみ感じています。

さいたま見沼よみさんぽ 第34号

発行 2020年7月

編集 「さいたま見沼よみさんぽ」編集委員会
〒337-0026 さいたま市見沼区染谷
1177-4

Tel 048-680-1891

Fax 048-680-1894

E-Mail johokan@yadokarinosato.org

<https://www.yadokarinosato.org/>

発行 公益社団法人やどかりの里
理事長 増田一世

印刷所 やどかり印刷

今号も「まち歩き」をテーマにしたお話をお届けします。

公益社団法人やどかりの里は、この大宮見沼界隈で障害のある人たちとともに地域で生きることを目指して活動を続けています。私たちは長年この地域で活動し、地域の皆さんに支えていただけてきました。

そして、この地域の人々が織りなしてきた歴史・文化、守り育ててきた自然、地域に根づいた事業等々をもっと知りたいと思うようになりました。合わせて、やどかりの里のことも皆さんにもっともっと知っていただきたいと「大宮見沼よみさんぽ」を創刊いたしました。

またこの度、広く地域情報をお届けするため「さいたま見沼よみさんぽ」と改題致しました。

「さいたま見沼よみさんぽ」編集委員一同